



モジュール3-3

● 表題・枚数・時間

- 各論—身体拘束・抑制と安全、モジュール 26 枚, 約 30 分

● モジュールの概要

このモジュールは、身体拘束・抑制について、安全の観点から検討を加える。

身体拘束の様々な弊害から、身体拘束をしないように医療の現場、介護の現場では、大きな努力をしている。しかし、術後の管理で、自己抜去の危険がある患者に、また、転倒転落を恐れ、同時に家族からの要望が強く、もし抜去したり、転倒転落した場合の法的責任をおもんばかって、拘束をする事案もある。このような場合には、医療者・介護者は、安全と、患者を拘束することのメリット・デメリットを図りながら考えているが、そのためのしっかりとした手順が決められているわけではない。

そこで、本モジュールでは、まず、医療者側の法的なリスクを自分でマネジメントする手法がある、予見と回避という過失対応(法的セルフリスクマネジメントを呼ぶ)をした上で、更に回避手段をするために、拘束を選択する際の(加重される)要件を学び、その後、倫理的配慮をするという方略を紹介する。

● 講師からのキーメッセージ

1. 法的な責任のために必要とされる「過失(予見義務・回避義務)」という要件を分析し、過失を犯さないということを臨床から考えてみる。
2. その上で、ある事例で回避の方法として、拘束を選ぶ際に、加重要件(切迫性、代替性、一時性)を、拘束裁判と呼ばれる、高等裁判所と最高裁判所の判決・判例を看一看することで確認する。
3. その上で、まず自らの法的なリスクをマネジメントして、その上で倫理的な配慮をするという方略を理解する。

● モジュールの目標

このモジュールを修了すると、受講者は:

1. 法的な責任の基礎である、過失という概念を理解し、これを臨床上の行動に置き換えることができる。
2. 拘束を患者のリスクを回避する手段として用いる場合の要件について説明できる。
3. 自らの法的なリスクを軽減させた上で、倫理的な配慮をすることを説明できる。

● 事例を検討するにあたって

事例

- 事例は、スライドの中でもいくつか用意しましたが、最後の事例は、COVID-19 関連の事例です。この事例でどのような方略(対策)を採るべきかを考えてください。